

授業作り	重点	・学習目標の明確化を図る。 ・ICTの活用を進める。 ・主体的・協働的に学ぶ学習を図る。 ・個に応じた指導を工夫する。	中間評価	・授業により知識や技能が身についたと感じた生徒が 94.8%(+26.3)、 少人数の授業が分かりやすいと感じた生徒が 92.82%(+23.6)、ICT を使った授業が分かりやすいと感じた生徒が 94.3%(+20.6)であった。 今後この水準を維持するために、さらに授業の工夫をしていく。 *()は前年比	最終評価	・授業により知識や技術が身についたと感じた生徒が 70.4%(-24.4)、 少人数の授業が 分かりやすいと感じた生徒が 64.4%(-28.42)、ICTを使った授業が分かりやすいと 感じた生徒が 86.6%(+1.7)であった。今後、これらの分析を進めるとともに、より生 徒理解を深め、少人数等の授業の工夫をしていく。 *()は中間評価比
環境作り		・安心して学習へ取り組める良好な学級集団を育成する。 ・教室環境を整え、学習や行動の決まりを生徒にわかるように示す。		・学校が安心して学習に取り組める環境だと感じている生徒が 91.6% (+22.9)であった。学級集団の育成と環境をより整えていく。		・学校が安心して学習に取り組める環境だと感じている生徒が 69.0%(-22.6)であった。この結果 を踏まえ、全教員が学級集団の見守りと育成・環境作りをより整えていく。

■ 教科の取組み内容

教科	学習状況の分析（４月）	課 題（４月）	改善のための取組（４月）	中間評価・追加する取組（10月） 	最終評価（２月）
国語	調新３年生は、「話す・聞く」の観点で全国平均を下回っているが、それ以外の観点では全国平均より上回っている。新２年生は、すべての観点において全国平均を下回っており、とりわけ「書く能力」の正答率の低さが際立っている。 学授業には意欲をもって取り組んでいる生徒が多いが、意見を発表することに消極的であったり、集中して聞くことが苦手な面が見られる。また、一定量の文章を書くことに苦手意識をもっている生徒も多い。課題提出については、下位層の生徒を中心に不十分な生徒もいる。	・意欲はあっても日本語の理解や表現が難しい生徒も少なくない。 ・作文などの文章表現に関しては、苦手意識が強く、また全体的に語彙力も乏しいため、重点的に指導する必要がある。 ・話し合いや討論、スピーチなど「話すこと」に慣れておらず、活動に消極的な面もみられる。 ・文法・語句に関する知識の定着率が低く、基礎的な学習内容の理解に課題が見られる。	・班活動やペア活動を多く取り入れ、自分の意見を発表する機会を多く設ける。 ・語彙力を高めるために、教科書以外の教材や新聞も積極的に活用していく。また、国語辞典も日常的な利用を促す。 ・文章を読んだ感想や自分の意見など、書く機会を多く設ける。また、作文は「型」を提示したり、モデルを見せたりして、個々のレベルに応じて書ける課題にして取り組ませる。 ・基本的な学習内容の定着が図れるよう、小テストを多く実施し、下位層の生徒や日本語の苦手な生徒のフォローを行っていく。	・区学力定着度調査の結果では、４領域のうち「話す・聞くこと」が全国の平均を下回ったが、それ以外では平均を上回った。ポイントを押さえた作文指導や日常的な小テストの実施を引き続き行っていき、基本的な学習内容の定着を図っていきたい。「話す・聞くこと」については、様々な単元で話し合い活動を取り入れるとともに、話し合いの際の役割を一人一人に身に付けさせることで、基本的な話し合いの力を高めていきたい。また、スピーチなどの発表活動も積極的に行っていく。	・区学力定着度調査の正答率を見ると、第１学年では66.2%（全国平均67.2%）、第２学年では65.9%(全国平均68.2%)で、とくに第２学年で全国平均を下回っている。 ・第２学年では、とくに、「話し合いの内容を聞き取ること」と「作文」に課題が見られた。日常から、要点を捉えて聞き取る練習やこまめな作文指導を継続的に行っていくことで、基礎学力の定着を図っていく。
社会	調各観点は、全国平均を若干下回っている。特に「知識・理解」では、全国平均値より低い傾向が見られた。「資料活用の技能」の面でも課題が見られる。「関心・意欲・態度」では、意欲的な面が見られる。 学授業は意欲をもって参加する生徒が多い。提出物の状況も概ね良好である。分野によって、興味・関心や学習への取り組みに差がある。	・意欲はあるものの、授業で学習したことが定着していないことが課題である。日本語での理解が難しい生徒も多い。 ・資料活用については、様々な資料を読み取ることができない、苦手になっているところが見られる。 ・社会的な判断力や表現力をつけていく上で必要な、基本的な知識が不足しているところが見られる。	・ICTなど、視覚に訴える教材を活用し、関心・意欲をさらに高めていく。 ・知識・理解については、反復学習を重視し、家庭学習なども積極的に取り入れ、その定着を高める。 ・資料活用の技能は、地図や統計などの諸資料に加え、新聞記事なども積極的に取り入れ、活用していく。 ・社会のできごとなどに関して、他者の考えを取り入れながら、自分の意見を述べる過程で、思考、判断力、表現力を高める。 ・日本語の理解が難しい生徒に向けて図や絵等を活用する。	・区学力定着度調査などでは全国の平均を下回っている。今後も基礎学力の定着を図るとともに、ICT機器などを用い、わかりやすい授業を展開し、学力の向上を果たし課題を解決していきたい。 ・生徒の主体的な学びを大切にし、他者の考えも参考にしながら、自分の意見を考えさせる。多種多様な意見や考えがあることを理解し、グローバル社会の一員として成長していくことを図っていく。	・区学力定着度調査の正答率においては、第１学年 44.7%（全国平均52.8）、第２学年50.0%（全国平均53.8）と、とくに第１学年が全国平均を下回っている。中でも知識・理解に課題があり、今後はより一層、ワークシートや小テストなどの反復学習に力を入れ、基礎基本の充実とともに学習内容のさらなる定着を図る。 ・ICTの活用は、興味・関心を深めるとともに、思考力をつけることにも非常に有用で効果的であった。今後も、より積極的に行っていく。
数学	調正答率は、全国より少し下回っている。 調観点別にみると、「数学的な技能」が少し下回っている。領域で考えると、「数と式」が数ポイント下回っている。 学授業には意欲をもって取り組んでいる生徒が多いが、問題集などの課題の提出となると、下位層の生徒の中には取り組みが不十分な生徒がいる。	・「図形」の正答率が高く、「数と式」や「関数」の正答率が低くなった要因として、授業と学力調査までの時間に相関があると考えられ、学習内容の定着に課題があると考えられる。 ・家庭学習の習慣が定着しておらず、日々の学習の復習を行わせることが課題である。	・「知識・理解」「数学的な技能」に課題が見られるので、演習の時間の確保をし、基礎的内容を反復できる機会を作る。 ・授業直後だけでなく、時間をおいて、学習内容の復習ができるような課題を与える。 ・家庭学習習慣が定着できるよう、授業終了時に授業の復習となる家庭学習課題を与える。	・全国学力調査、都学力調査の結果では、都の平均を下回っているが、区学力定着度調査では全国の平均を上回っている。今後も基礎学力の定着を図り、出来る喜びを感じさせることで課題を解決していきたい。 ・家庭学習習慣の定着のため、家庭学習課題等を提示し、質問教室等でサポートを行う。これにより基本的な学習習慣、学習内容の定着を図っていく。	・区学力定着度調査の正答率においては、第１学年64.1%（全国平均60.9）、第２学年57.2%（全国平均57.6）と、ほぼ全国平均と同じ程度である。 ・課題となっていた、内容項目の「数と式」は-0.1であったが「関数」は+4.3、観点の「知識・理解」は+3.5「数学的な技能」は1.8の変化が見られた。 ・第２学年では数と式、連立方程式に課題がある結果になった。スパイラル的な学習を進め、時間がたっても学習内容が定着している状態にすることが課題である。振り返って繰り返し学習する学習形態を全学年において行い、学力の向上を図る。
理科	調「技能」「知識・理解」で全国平均を下回っており、特に「思考・表現」ができていない。しかしながら、理科に対する「関心・意欲・態度」で興味や関心はやや高い傾向にある。 学授業は意欲をもって参加する生徒も多いが、下位層の生徒の中には取り組み方（提出物の状況、実験レポートの提出）が不十分な生徒もいる。	・科学用語の理解や実験手順の理解に苦手が見受けられる。 ・知識の定着不足の生徒が多いが、この要因として家庭学習による学習内容の復習が十分でないことが課題である。 ・中位層から下位層において、自ら課題をみつけ解決しようとする姿勢が不足している。	・知識の定着を図るために授業開始時に授業のテーマの提示、終了時に授業内で行った内容に関する知識の復習、定期考査試験前の語句や知識の復習を行う。あわせて、家庭学習の充実を図る。 ・実験方法や実験により得られた結果について班で話し合い活動を行うことにより、自ら課題を解決しようとする姿勢を育成し中位層の底上げを図る。 ・実験の目的を明確化し、実験手順の意味を考えさせることにより実験内容の定着を図る。	・区学力定着度調査、都学力調査において都平均を下回った。特に思考・表現と知識・理解分野における課題が見られた。今後の授業ではICTの活用を積極的に行い生徒に興味・関心を持たせ授業内において自然科学に理解に必要なとなる知識を伝えるとともに家庭学習の充実を行い知識の定着も図る。また、生徒に考えさせる機会を多くもつことができる授業の展開を行い思考力の充実を実践していく。	・区学力定着度調査における第１学年の結果では正答率 48.8%で全国正答率とほぼ同等の結果になった。しかしながら粒子や観察実験の技能の分野の正答率が低く今後の課題である。 ・区学力定着度調査における第２学年の結果では正答率 48.6%で全国正答率をやや下回る結果になったが、実験時に目的を明示し器具の扱い等について説明の徹底を図った結果、知識や理解の定着が図られてきた。今後も授業内容の精選を行い基礎内容の定着を図り、上位層の充実の為に思考力を養うような授業内容の充実を図っていく。
英語	調新２、３年生ともに、全ての観点における正答率は全国より上回っている。 調他の３観点が正答率 60%を超えているのに対し、表現の能力は新２年が 47.7%、新３年が 48%と低い。領域別では、「書くこと」の正答率が「聞くこと」「読むこと」に比べて低い。 学授業には意欲をもって取り組んでいる生徒が多く、言語活動にも積極的な態度が見られる。「書くこと」による表現活動には苦手意識をもつ生徒も見られる。課題提出に関しては、中位層・下位層を中心に取り組みが不十分な生徒がいる。	・「表現の能力」を伸ばすために、各単元での言語材料を用いた表現活動に重点を置いて指導する必要がある。 ・普段から様々な場面設定をし、その場面に応じた返答や言い回しを繰り返し指導していく。また、今後求められる即興を意識した言語活動を行う力を身につけるために、知識中心の指導ではなく、発表等の表現する機会を増やす。「話す」だけでなく「書く」ことの指導にも重点をおくことが課題である。	・ペアワーク、グループワークを多く取り入れ、既習事項を活用しながら自分の意見を表現したり伝えたりする活動を継続的に行う。 ・既習事項の語意や表現を用いて、話すことから書くことへのつながりのある指導を行う。 ・既習事項の語意や表現を用いて、英文を書くルールを理解して書くことを継続的に指導する。教科書の各パートにある「Write」を活用することで、短い英文を書くことに取り組ませ、Daily Scene でまとまりのある英文に取り組ませる。	・学力調査の結果から領域別の「書くこと」「読むこと」「聞くこと」において、全国の平均を大きく上回っている。観点別では、４観点とも全国の平均を上回っているが、「表現の能力」は４観点中一番低い。英文を書く練習を継続的に取り組むこと、学力調査では点数化されないが「話すこと」の表現の能力を伸ばすために、授業内での言語活動時間を確保し今後求められる「即興でのやり取り」に対応できる力が身につくよう指導していく。	・「聞くこと」「書くこと」「読むこと」すべての領域で目標値や全国平均を大きく上回っており、普段の学習の定着がうかがえる。継続して繰り返し学習を行っていく。 ・「書くこと」の領域においては「単語の並べかえによる英作文」の正答率が61.2%、「３文以上の英作文」においては45%である。引き続き、自分の考えを表現させる活動の時間を増やしていく。一方で、「場面に応じて書く英作文」の正答率が 25.6%と低い。様々な場面を設定した英作文や表現活動に積極的に取り組ませ、学力の向上を図っていく。